

政演画入
百人一首和歌始末抄全
出東京傳作



百人一首和歌
 歌咏衣抄自叙
 者周昭王以翠
 鳳之毛為二卷
 一曰燠質二曰
 眩肌集今也松
 系館深孔崔為
 衣裳曰之跡著
 曰如衣裳也通
 之衣裳以八丈
 為袖藏之衣裳
 以木綿為錦也
 如其以錦為木
 綿以八丈為袖
 不久一對從如
 衣抄而為百文

13
2874

門入利
號3776
卷

2874

大正七年三月六日
室井平藏氏贈





○ 天智天皇所製一首

○ 持統天皇御製一首

○ 柿本人麿一首

○ 山邊赤人一首

○ 猿凡六丈一首

テ三至九 モツテサキヲ ヤミナレ
天持柿山猿 ハンビ物

右みそ口決、大りナレバ、
モラス

ハツロノス

中納言家持

天武王日本記作者

家人親王

又作舎人

家田屋太右衛門尉

新吉原娼家

家橘 市村羽左衛門

家暮 坂東三八

家持 一説ニ
此ハリニキカクテ、ソノクセニ紋所ハ
通ナモニニ。通ナ紋ヤキ持ト号ス

よほろちんとくふあり

赤石須麻

げんやん

わづであつて今川のよびは
あつてゐる

源川と長

とてふてよめバウとありまのやぐい

一々とふとふとぞとあり

さぞちてあぐひ 夜^よいちとうち ふさるぞ

つゞねふくろうのんぐとろのおやめ

三

ふふふ。はふふふふふふふふ

いーやかとさぶーやふふの女ふふふふ

五

人々

列子

聖人
以
財

謂之通

人云
タルテ通ダトシル

白虎通
卷ノ三ニ曰

聖人者何聖者

通也云

陽成院

はくしもの

後拾遺集序

はくしものつらと

白糸の思ひいふ

河東松之内

のさうつてつてつてつて

同書

いぞはりてつて

るふ

あふりあつ

近江京司

堅田落

あふりあつてつて

まふちくさかてつて

武部源藏門人

誕緑文庫

名頭文字

拳定鶴亀

松竹

画本半字治川

猿人狂哥

あふりあつてつて

あふりあつてつて

莊子

鶴不日浴白

あつてつてつて

あつてつてつて

男女代八卦

十二んちゅうの

やあひの母つれ

あふりあつてつて

はくしもの

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

あふりあつてつて

和漢朗詠集

鶴^{カヘリ}歸^{キウ}舊^リ里^ニ

あつたふりささささ
あつたふりささささ
あつたふりささささ
あつたふりささささ

相鶴經^ニ曰

鶴^{ツル}陽^{ヤウ}鳥^{テウ}也^{ナリ}

因^{ユル}金^{キン}氣^キ

あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ

花扇書待乳山碑銘

名月やとらひの

あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ

五町

やどしれをその山さうごうて孫あら

ふみす人あらふごうて孫あらをあらと

ありねるといふあり

兒女唱^ニ唄^ニ曰

あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ

はあふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ

江戸砂子

あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ

東海道中双六^ニ曰

あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ
あつたふりさささ

在原葉平朝臣

本院左大臣

時平^{トキヘイ}

基経男

金平^{キンヘイ}

坂田

川越平

川越産

アイトハ人ノ名デハナカツタ
ハカマニスルモノダヨキヤアカレ

實平^{サツヘイ}

土肥二郎

佐^ニ鎌倉殿^ニ

兼平^{ケンヘイ}

今井四郎

佐^ニ水曾殿^ニ

大平^{ダイヘイ}

三ツホコト云

スユイツモバンシル
リセタ

葉平

道外百八首

あり平のふ

ちやあふらふと
くみふくらふり

下
勺
略

毒虫去ル

子日乙子

道徳の道

新田川

古今和歌集序

秋の市々 越田川
ありてゆきちハ
えかとのあやちハ
ふいと人なり

嵐雪玄峯集

とすひと

秋の
みづがや

五

わろれおろろろろ

けぢのあまねく人々のあふれどもこのあ
やまらとたゞ一に傳とある可

やまらとたゞ一に傳とある可

らゝやぬる。らゝやとよ女房ありたるが
ある角力取との女とわけてゐるびん
は女とよとやとよとよとよとよとよ
角力とりとよとよとよとよとよとよ

角力とりをよめさんぐかりん

神代もさういふの角力とりなりや
あつたかゝる一ひたりぬしてゐる人

かゝるものゝひらぬしてゐる

いりと女中の神代よりをさへひてきられど神代もさへつねねあり

新田川○の角力とりのゑを新田川とす

ちのほ角力とりをややとうやとや
 やとやとやとやとや

あふさふさーる

かううれあふすのちやいあまうとやを
 かうくして年あけのあふもせうあ
 とあふもあくつひあふもあひの女
 房とあつそあふもあふもあひの女
 房とあつ今あふもあひの女
 房とあつ今あふもあひの女
 房とあつ今あふもあひの女

西より来るか、のうきや、のうきのか、を

うらららあゐ

當流小謡

山姥曰

柳ハミどり花ハ
くれあゐ

あうぐり

てすり唄ニ曰

いそねてめがくあひ
とてからと川（水）と
あけて水ハ一つむきハ
うさるもさあまの
とんと云々

わらひまじーがたつて川ハむくのいも
かゝるあゝからとねねとものふとからん
あゝとあゝと

あうぐり（り）やあゝせんろあてえあん
よりいづと水とあはんとわらと川
水とあびるものふとあうぐり（り）
とは〇とはトハ（り）やがわさるあり

伊達競阿国戯場

けあのふとつれり

角力とりとさぬ川（り）田川（り）あゝのあゝ
よりてちやとさぬ尾すよりさとうあやと
あんせん寺とさゝとさゝとさゝとさゝと
代とさゝとさゝとさゝとさゝとさゝと
あゝあゝとさゝとさゝとさゝとさゝと

伊勢

伊勢平氏嫡流

伊勢喜

豊竹伊勢太夫門下伊勢子
アタ名ヲトウナスト云

伊勢三郎

義経ノ臣
四天王ノ人

伊勢四郎

御藏前

伊勢

竹村氏

吉原佳葉子屋

伊勢

不_レ老_レ

ふいのまゝに不死ふし間のまとちり引ひきさすべし

やうきあり

不死國
人色黒^ク而不死^セ樹有^ツ
食^イ之^チ壽^{カシ}泉有^イ饌^シ
之^ヲ不老^セ

矢根五郎なりふ

DO
DO
IN
ÆU
S
=

アワノモチモ
AWANOMOTI MO
イヤイヤ ヅバキリ
IYAYA ZOBAKIRI
リヂメニ シイタイ
ZOOMEN KORITAI
ナ
NA

異聞集

謠曲耶
二
日

さうゆゑのまへ栗飯の下畧

又考 馬双紙 金令生 生榮 化夢 侍ルカ

又一説は水の泡で世と云ふらんやうと云ふ

引去あり又久々なること

維摩經
方便品

是身如泡不得久立

素性法師

素盞烏尊そこのこのこと 神社考とろとろづ 道い者

素靈烏尊

素々法都

辨天經ヲヨミテ所中ヲ

素傳

子華氏


神田玉池佐
素外そがい 谷氏。俳人
一陽井上屋

素外

一陽井ト号ス

素性

周易



朝
爲

此以

イ
フ
ミ
ラ

11

之

五

狂言記

子

125

二六

春無

ト
ナ
キ
ノ

○あり

卷一

NOTE

10

卷之四

聖久の

八

1

1

一

11

2

31

とある

一

卷

子

一

女

稻荷末祇
福大明神

長崎の面

人とのつちのこととのころを
よきとよきちくしやうの下界

大內鑑

子に之の盤曰

どきどきや瓶の子どめのと

三條右大臣

三條小鍛治宗近

三條右衛門 なかりん 熊坂が手下

三條勘太郎
哥舞妓娘形
京下リ

三條小六 ころく 曲マリニ各アリ
マリノ小六共云

三條右大臣

稻荷末祇
福大明神

冬王のおととすめ入の
羽今と
とととと

五云ハ云々れあてのゝ
あらかとあり子なり

人子あざむけせんうと
あはれ今ハワごと子か
くこととあらわ

寒氣よりく病
なりて初てまゐとあり
より、薬月といふまゝ

まゝのうへに平九でもまぶさるゝあのみやき

てうひのとちやうまのかりとて

づらのやうに白髪とらるゝわがしを

一

人みゝられて。けおち、そでふんのふら

ねりのやうにか女房とわかれてのうとあんな
でもどうも内はさきこの人うとみづうれるで
あうんとさうのどくぐりてえ

くろよーちう那。○ころ八月下旬あれと

あふのいりんぐ也よあ入りてくる夜も
まねがかりくよつて来夜ぞ哉とよ

3

三十振袖四十嶋田

白樂天詩曰

昔為京洛聲花客

はなをむむうーか
 束のひかりのりさやう
 まてかちやうくをやりー
 むすあふーいごとさう
 うーいのふあり
 中むりーあまの
 むすめとらうまてと
 ゐうーいのふありーも
 はなをむむうーか
 ゐうーあふーい

春道列樹

竹本

春太夫

正傳フニ元祖

春富士正傳

春信

鈴木氏
浮世繪師

春道列樹

一説はけんなぶらゝ
 さとわんで六あゝぐ
 すふでりうとさゝま
 やすひのころあり
 うゝうてのをさ
 へつゝひぞといひ
 より世の人まゝのつ
 らとつゝふがよ
 かりもさゝま
 とといひとて
 らけんらのころ
 むる

倭名手本忠臣藏

七
二
日

七候曰
たぐひてふにせむけて
とくはさるるのたふさふ

江戸名所往來
二日

汴水志

上
知
文
添

卷之六

竹園屋張札

定

御製

一切寶物
版中

馬交馬

一、新設附外系

利源通

一、取

一雙也八月

3
風
之
P.
64

仲園行古

在

五明樓墨河文庫

卷三

名ふれり川

山をめぐりてのわけなるまゝみい
流れもあけぬものなりなり

東武平川のあきくにむらりのとめ女あり地まらむ

いふやうにあらうとて坐てこのうらとてい

よびくろくろそれあらねようふふあうら

くさうはなびーんやんまの

そふふしてらぬ世もあるとてふあるにふ

山崎子。品川より八海等のやうと海側より

山崎のふと山崎とふとあふぐのふのふ

いふふゐると女入

わせのうけとる。いめんどうてうういせ

とろけつるさそばんとひきまぶづとのち

のちやう

あくらこひ。けやうふうりそむぐしーう。

男へあつてむいひで

ふくれも何れも○どろろちのふがゆるもれ

久曾小阿毛取也

ちちあまなり。づれまのちちなり

とあさしめしるをよし

あへぬも

めりやまの袖

つらとわつひつら
したとらもやん
あつひつひつあ
やつてや

つらとわつひつら

謡曲道成寺

つらとわつひつら
つらとわつひつら

史記

仲尼弟子列傳曰

犁牛之子騂且角雖欲勿
用山川其舍諸

○孔子曰山川側ニ大本戸ノ牛ヲ
見テ曰フ語ナリ

忠親あかみ序

山がふるまをてかく
世のふるまをてかく
○山川のふるまをてかく

一説

哥舞鼓惣執頭

慶子

中村富十郎

弘慶子

セシノ人

辨慶

義經臣

運慶

佛工

惠慶

未詳

惠慶法師

惠美須屋八郎左衛門

尾張町

惠美押勝

道鏡ト
全時ヲ

惠心僧都

名ハ源信

惠慶法師

十載和歌集

糸のめのとめ

むら—糸—ねのこまき
それふくらむくらの
者ささ—てけるうふ

むら—糸—とむら—は
あつりて—と—のふも
ねのと松屋やの隙山
と—て—う—く—女が
伝—う—今—け—も—く
こ—と—の—林—と—あ—
も—う—う—り—つ—の
ふ—も—う—の—お—と—
て—う—う—む—の—の—
あ—も—今—人—も—あ—
さ—て—う—う—の—れ—が—
て—あ—と—あ—う—さ—

本所七目

糸屋阿房情下二日
同ガツブレメラナヲノ

事アイリノツキルハ
ジヤウノモノニ

本草綱目

ウロモノ

土豹

土中住虫形

似鼠

コレ俗ニムクラ
モチト云モノ

さい—氣

茶道大全

茶事い番の鏡
うると好むあふ
糸の鏡うと好む
也

八重むらうらむけあふ糸のむら—れ
うらむらうらむけあふ糸のむら—れ

中むら—のうらむけあふ糸のむら—れ
やうらむけあふ糸のむら—れ
えぬとむらうらむけあふ糸のむら—れ
目の隙山とむらうらむけあふ糸のむら—れ

八重むらうらむけあふ糸のむら—れ
ちとむら—の多くあふ糸のむら—れ
りんとむらうらむけあふ糸のむら—れ
まむらうらむけあふ糸のむら—れ

あけぬらむけあふ糸のむら—れ

あけぬらむけあふ糸のむら—れ

あけぬらむけあふ糸のむら—れ

あけぬらむけあふ糸のむら—れ

あけぬらむけあふ糸のむら—れ

あけぬらむけあふ糸のむら—れ

あけぬらむけあふ糸のむら—れ

謡曲景清 二曰

こゑをきくまゝにけりども
うかへりまゝにけりども

老子經 二曰

五色令人目盲

盲

左傳 卷六

目不見其色

之章 爲昧

城州嵯峨五臺山清涼教寺藏版

梅檀瑞像記 二十五牒目 二曰

文昭九年の比々其の所を破換し
鳥山の何某とて是れを細工の者あり
くふや付て他處に遷し

貴家御文庫

二糸家口傳秘書 二曰

一繪とある經冊を授けし

月日の下流いたとくを授けし
筆を授けしとあり
標名のふい目とあり
るもふいふ馬を授けし
眼とありふいふとあり
りるありふいふとあり
今梅子これに授けし
以來の書はあり

源重之

畠山左司

重忠

善本琴

重井

御乳人

重太夫 三元祖

重太夫

重政

曾受

重政

北尾

重山

遊女

豐重

富本門第

重之

田所町住

風と云々

病源論曰

風邪寒熱毒

氣

肝取也

凡病の起るは

傷寒論曰

發陰者七日

發陽者六日

又詳後を振出能書

殿丞療手引

風邪六七日不

小便頭痛者

氣湯與

大成論曰

風邪万病爲

長

山石の波の

文選海賦曰

飛沫起濤

波アラキ事

歌音神詠

波の下畧

凡と云々波の

凡と云々波の

凡と云々波の

凡と云々波の

凡と云々波の

凡と云々波の

凡と云々波の

凡と云々波の

凡と云々波の

漢武敗鄧支進馬肝石帝
以此作硯

おのれ

小野宮を字に曰

巳巳巳巳

まてておのれハ

「とてやうこと全市の
おのれハ」もつて
うといふ破るの

のこ

玉公

金

穿ッ
器也

めやき筆

破のうまをさし
さしひつめさ
らうとさし

藤原義孝

朝夷名三郎義秀

新田小太郎義峯

大星由良介義雄

義亮
男
義松
長男

義孝

ととをわけかあき
べやふふのびてひとり
おの女が

あゝあゝとやりひるゝの

とよむるを

とていかに目ありとも

とくわさるゝいのちさへ。けさうに虫脈とく

唐子来

73

唐李克用一目眇^ス取^ニ号^ス

独眼龍

長くもふと

懷忠手本忠臣藏

七
順
因
二
日

女のふこのゆゑやんば
りしてゐるうとらぢ

めりやと秋の夜

長くもふとらふに
榮のいのちもよめ
うへふ

人害一眼目國北海之在東

け女子源氏も家来の
養女とてしるふうかばく
あつた東の名のこま
ゆづん石山おふとりの
かのわうりときて
あつたさ家来のあつた
かんとあつたわうり
あつたさ家来のあつた
つひねのとなとあつた
あつたさ家来のあつた
あつた

河東松の内 二 曰
いふとあつたあつた
あつたあつた

紫式部

後小松際落着

紫野一休 りきききの 大徳寺

紫こめ姑女こめ 姓ハ何字ハ媚
見ユ紀原代

紫夕セキ 又濃コ紫シ上ウ云クニ能ス書シ画エ香ウ角玉屋抱遊ミツタマヤウ女メ太夫タフ名跡ナセキ

紫式部

源氏物語作者

ふと二がふめさでーも
さんでとくもひそと
ーやえり

唐詩選
平蕃曲其二

空留一片石

萬古在燕山

○ムキニクザリヤウ。一片ダケメ。
コ石ヲトラシテ。シマウメ。
コトジヤ。ソレデモ。バンコノ。
石ハ山ノゴトクアルヲ。ミテモ
ウラメシイ。

ちぬきまゝ
曰

九
ありて
大

十九丁十二日

めりてその名を
さげば赤に寄け月めり
ふりてさうとん

とふけりて首

あぢのうのよりあぢの
あ

めくらをいひてとーやそれならぬます
くもかかれホーよいつてもうね
ある人のめくらをいひてむれて二茶ま
けらるゝとさあめりなうし
めくらをいひて○めくらとーわいて
こーやそれと○よくあつたらぬ花がうてや
といふまづつたられどそれともよくしてんを
らやうといふんぞにやそれとぬとにやう
けつねちよ○すていとくわあんなにけつねは
くもかかれ○とうふぢぢるとせいのんでえうら

とり寄せてこれで赤巻のあぐろとりみせ
そのゆと九もかれとよむ

ふーホー○二歳とびアやうてふーとよめう

とく二枚すけてゑまふとめし

小
今螺子あはれ

よしのつとむりか。○ぶふとててもあやうぶよ
くつさぬけさうさくとあやうら夜
いあけちあれさうよよい弱あり

唐人の寝語曰

賭銭輸得清光
メシリヲウツテキレイマケタ

深川勝哥

「お月よなう
めくろがさきで

めくろがさき

すこめ月まめくろめ
つねへそでよあま川
つむるめーもーに
とけぬんとさよかり
うそーうそーうそー
ぬめ

哥舞妓大帳曰

お舞妓三めんのかうさ大んぐらのさ桐の
ま本目よけのあかより六のくどやすすむる
をけ下座のさすこのさつあさる

仲系

一 あさねのあかみんらま村の洛川のあさんせろ
上使のさむむささろと下りてへりて

一 へい上使とさすもさけりあさねのさ
さかきさのさのくーろくさのめ

一 へいあんとさすささりありささるやう
ささるささる

一 ナニくめくろあひてさやがねとあささ
ささるささるささるささる

一 悔れ
ささるささるささるささる

一 九もささるささるささるささる

一 悔れ
ささるささるささるささる

左京大夫道雅

道端賣餅家太郎兵衛殿

道長

御堂
関白

道實

天神サマ
ヒヤウトク

道成

シウ曲
道成寺

道無

アサキ三ノワ
台者ツラタツ
ヌレバキニシレ
ヤス

女子

松葉屋新造
道汗

道雅

○ミチミヲホドナク
コノコロハ袖ヲトメヤシタ

これより知る由

5422230425ms 6m 24 1/2

とひえふとすすもうとよるに

論語

人之將死其言

也善

「いふこと」

遊女白目が哥ニ

「つらつら」は「うらやま」の
「うらやま」は「うらやま」の
「うらやま」は「うらやま」の

摩訶摩耶經ニ曰

辟如旃陀羅羊

至屠所步步近

死地人命亦如

是云人命ハヒツシノ

△セシタニトハ天デクニテ

狩人ノコトヲ云フ

権中納言定頼

定之進

猿樂

見深分手綱ニ

定九郎

斧九太夫男

為勘平が横死ス

定光

頼光ノ臣

又作貞光ニ

定頼

朝あけうらの川さうさへ
あけうらさるせのあーらふ

新づらけ

平都婆裏林文曰

中天 アサ ボラ ケ

南天 フシ ボロ ケ

ムカシク天竺ニモ
アツタトサ

早引師用
氣形門 細

日本記
鯨 トラナリ

一名
イセゴイ
イセゴイ
十ヨミ

見
順和名

まゝ祇なうがふり川の古みとよめり

新づらけ。○まゝ祇なうがふり川とよめり

ふねふなり川のかゝ細とくまゆじゆ

づらけハ細とくまゆじゆとよめり

とふーやとふ

うらの川とふーやとふ

ぐねとて居るうらとふとふとふ

川とふとふとふとふとふとふ

のふとふとふとふとふとふ

とふとふ

たえーふのちとふとふとふとふ

いふとふとふ

何とていふとふとふとふとふ

あまのせと川とふとふとふとふ

さあふ人たのふとふとふとふ

てふとふとふとふとふとふ

せろ。○せのふとふとふとふとふ

何とていふとふとふとふとふ

ふのあふとふとふとふとふ

せの錢ナリ

風俗通 曰

錢 号 為 孔 方

兄 云 如 兄 也

神錢論 曰

錢 曰 孔 方 无 異 而

飛 无 足 而 走

○は 流 する こと

後 足 跡 器 あり こと

「は 流 する こと」

「は 流 する こと」

風俗文選 許六錦倉賦 曰

片瀬川 子ハ 家 家 家の けとらうー 滑川 子ハ

太平記 音 砥 藤 細 滑川 隨 十 錢

鎌倉武鑑ニ曰

主目砥左衛門尉藤綱
モリ前 比サ上デ一カ石
ナ久錢 面クボテ百カ石

鏡ヤ ナフリカハ

ヲサヘ 木ノ字

時献上 緇一本



細ノ
物

ぢんごう記

才十に綴るうまうひのめ
たふバ後を愛のうらまてぼらと六石
三すう又うまうひ川へ十文とくした
あといわうらまてうまうひ川へ十文とくした
へ系代と十二文とくした後とくした
と男目やうとくした又つうりすうの
とぬらうとくした代のうらまてくした
といわうとくしたあといわうとくした
こころふとくしたうらまてくした

延喜式 卷之五

五位食法ニ曰

東鑑隱岐鑑鳥賊各一兩

箱一兩二分

○イトダんぐらうんバ綴一本が
六る三千ちふいやまひのめ

祐子内親王家紀伊

然阿上人

紀主禪師

紀文

紀伊国屋文左衛門。事ハ
見吉原大全 奈良屋茂左衛門上全時

紀上太郎

浄瑠理作者
見白石廟 跋ニ

紀名虎

見文徳實録ニ

紀伊國屋

沢村宗十郎
訥子

紀伊

かうしてねまて物て
いふううううううう
あううううううう
いふううう

ねんじり

元信百鬼夜行

滞女
おきりゆき

うつれお後 かつらの巻曰
れと。うつり川のけり
ある所とありむとあり

小川

源氏物語
松風卷三

かつらのゐん

おもふはたふと
おもふむとのち

催馬樂

514. *Quercus*

あひをもちて。からさ

くひはるゝいゝあるあびぞ
いゝあるあびぞ

そのおひのきう

樂府詩集卷之四十五

乃得淑川仇波

おとんとせふ日暮ちう
あふせとぐんねあご
ゆりと下略

音子さくさくしぬ浪のほとけ波り

かけしや袖乃ぬれもしそと鏡

けふから之を長あつたの程云とよあり

高子云々○高子云々云々○高子云々

よくよくとて氣と聞とあふりてよろ

富^くれ溪の○富^くら^くやと溪村やと森名の

かゝら字と二字つとへりこれの

めうあふ

何と波子のおまゝ長えのぶちうらりのげんざ

乃ち瀬川の仇波とてる也之
 也

かけや被の○おとんと長あつぐとあつと附

ハ
ワ
セ
ル

あり袖と長ちうがねえりけりるめえは
一白いあまのありとよめり

ねれもこそとれ ○けりふい子ぬれす

又ろく川とける時
社とみげどいあふ

ぬれもいとすきとよふあぐり

淨土文三曰

夜夢正直心常歡喜

色光澤所作吉利云云

夢とハてのせとていふぬありはちとていふなり
之正直とハての直情といふの心常々歡

常くよりむにわがてよりこそよ
艶色光沢
艶考がうのうくこそはぬる
所作吉

お作よりとてきてひきうをんきの吉のド

松本幸四郎ハ琴高仙人の
生れかゝり云々説有

列仙傳曰

琴高善鼓琴后得

仙乘赤鯉来人間

○錦考善鼓琴后得給金乘

赤鯉至京都○事ハ詳也

漢書註

鴻聲肝傳

之也

○漢ハ通事ヲ

△今スハ千。文字ヲ
アラヌ。ゴウロヲ。
サカシマニミテ
路考ト云

これらよりいへば
せらるるべし
ふとくふべし

源俊賴朝臣

俊陰

事ハ詳
うははゆは

俊賴

一説此人百人一首ノウチニツイツチ
年音エヘ名トス

うわつる人さうつ瀬乃山おろし
はさうかれといのらねりの紙
やまのうらうらこのさかりはひらうの

龍田ノ社ナルベシ

女ありき人のむさめ子とむさうに安
いそらありねとて母とてのつてとのと
めてかぬうう太一やうけのねとてんま
ごねあのおとくすひーうけ女とてん
ひーあまんとてめとてんさんとのめ
母一はあんど二月のちうとてんひる
神（み）のうとていののちあめりうとて
ととあひますでうとてととあひ

女は男の心につれ一男うらうとあ
 娘の心はとけるあうとれとうかり
 とよあり

人と。ものもの人ときり

ちう 漱乃○その女の名と初はつ漱とよおしと
いふけやうかゝるをつくりあり

山おろー。○そろせとさんびつゝか女使ともの人と
いけどんふ男がでかどくちもいれちろーと
ふとちろちれのおふでのゆへ

みはげーなまゝといのゝねめのと。そのもう
みはげーくまねつけとつけうちそれとい
のらねめのとと母のちあうくうと下のち
にちあてよう

和哥八重垣ニ云

をらせの靴を
このうきとふ

け女とちまねるゝとて
とめりと一なるゆへ
子あり子のとらせと
りゝとて一

くわんてん

三國志

枕草紙

「さうげあるもの
ふすべられしる」

「瀬川がよるれは」

宗祇秘中抄ニ云

山名枕「秋あり
七夕の枕」

「山名はたさ川子
そうして枕とて
あらざるもまれなる
七夕の枕といふも
半大夫」

黒小袖 たり

めも「ちあとのあやや
こひひ」

「山名はたさ川子
そうして枕とて
あらざるもまれなる
七夕の枕といふも
半大夫」

瀬落速見・瀧川

中臣太後

落・瀧・速川・瀬・坐・瀨

姓氏録ニ云

瀬尾 橘氏

栄花物語「さう花の巻」曰
中宮大夫（右中納
言）

隼人司ト云官ナリ「さうのさ」

馬本

歌打古郷錦

瀬尾勲左衛門好色のりあり
け人隼人「さうあり」

見 前漢書

参議雅經

經若丸

文字經 常盤津
門弟

清經 鳥居氏
淳世画工

祐經 工藤
左衛門尉 雅經

みどり山の秋風はよあひて
ゆるさくむく夜うつあり
さかたのぼりさなううてやれ

こころの

歌六所縁字櫻

まゝにこころの山口
りてこころの山口
こころの山口

山のゆき

新吉原観見記

山口屋の

秋風

あきのかぜ

なるめとよめるか

こころの。吉原の橋のこころとよめるか

秋のこころとよめるか

山乃秋風。角丁の山口やふゆの風とよ

めがかりて

まゝあけて。かのがうずは秋風とよめるか

りてやうづは秋風とよめるか

うづは秋風とよめるか

あきのかぜとよめるか

ていねひとよめるか

うづは秋風とよめるか

あきのかぜとよめるか

こころの

後波同音序

あきのかぜとよめるか
ふゆの風とよめるか
さきのかぜとよめるか

こころの

唐詩選 李白

ホウツノヒヤウトル

萬戸擣衣聲

秋風吹不盡

女郎ノ名

宗徳集 題松下擣衣

略 山の嵐子衣

うづは秋風

山とよめるか

使然草ニ云

あきのかぜとよめるか

川柳

柳橋 五編ニ曰

これも又とよめるか

能諧

とよめるか

あきのかぜとよめるか

秋田城介鬼女物語

文言曰

行末ハ秋風ノ

一夜ニ替ル人ノ

心見弄ラレシハ

一定也左アマニニ

於テハ悔共何ノ

益カアラシ

初衣抄終

江次第 十四卷ニ曰

あり平とものころハ在中おきて 中畧
おと家ぞしれくさのころとくさ
さんふあおつものさやとくさ
あり平とものころハ在中おきて 中畧
おと家ぞしれくさのころとくさ

琵琶行

粧成海被秋娘妬

秋風ガコトヲ云

秋風ハとんざやとんざやとんざや
あつとんざやとんざや

かげろう日記 上

その中にあつとんざやとんざやとんざや
とんざやとんざやとんざやとんざや

「とんざやとんざやとんざやとんざや」
とんざやとんざやとんざやとんざや

京極黄門殿小倉山莊色紙
百人一首和歌秘中抄一帖
青樓妓女駒治雖傳之堅可
禁外見者也

茶飯吉奈良京橋

山東源京傳 在判

天明七歲丁未正月初店日

